

妖刀幼稚園

保坂歩

■登場人物

千口^ハせんこう^ヾ水間千晶^ハみずま
ちあき^ヾ
：妖刀・幼稚園の先生
たけ[：]男子園児
みか[：]女子園児
加藤ミヤ[：]千口と同僚女性
岡田入^ハいる^ヾ：千口と同僚男性
佐治^ハさじ^ヾ：園長

■とある村(数百年前・夜)

大きな火事、立ち上る煙、焼け落ちた家々。

日本刀を持って立つ、白髪・赤瞳の浪人の後ろ姿。

M(モノローグ)「切れぬものなど、何も無かった」

大勢の侍が刀を振り上げ、浪人に向かってくる。

浪人、斬撃を軽く一振り。

刹那。

侍達が持つ全ての刀が折れ、闇に血しぶきが飛散した。

返り血を浴びながら、嬉しそうに高笑いをあげる浪人。

刀が何かの気配を感じたかのように、小刻みに震えている。

浪人「(刀を見て)出てこい……この己おれから逃

れられると思うな」

M「己は人を切るためだけに作られた器物―

―切り続けることを許され、年を経て命を得た」

倒れた侍達の向こうから、僧形の男が現れる。

僧形の男「主を失った哀れな九つ十九も憑りきよ。

あおひとくさを切り刻むワザ以外の全てを忘れたか」

浪人「(刀を振り上げ)元からそれしか知らぬ」

僧形の男「劍神、天あめ之の尾お羽は張りの名に於いて―

―今はその刃、奮うことまかりならん」

僧形の男が符を翳す。

浪人「劍神だと……？」

僧形の男「汝ら刀劍の九つ十九も神が属する神は、

汝に哀れみと期待とを覚えたのだ」

符から激しい稲妻が生じ、浪人の刀に落雷。

浪人「(驚愕)が……！」

刀を落とし、全身を焼いて倒れる浪人。

僧形の男「目覚めの日を待て。劍神の詔みことりに

より貴様が遣われるべきその日を――『妖

刀』千口よ」

僧形の男が、刀を睥睨。
刀は妖しい輝きを放ち続けているが、
やがて夜の闇に包まれる。

■ただ深い闇

M 「何年経った……？ 人を斬らせろ……」

M 「いつまでこんな所に……おのれ……」

M 「何も……無いな……」

M 「誰か己を……握れ……」

M 「誰か……頼む……己を……」

熾烈な雷鳴が響き、闇に光が差す。

■幼稚園の裏庭

不穏な暗雲、降り注ぐ強い雨。

雑草に埋もれた祠が、雷で焼け崩れて
いる。

祠の中には、符と鎖で嚴重に封じられ
た刀が。

祠の前にはエプロン姿で長い黒髪の

女、水間千晶(23)が倒れている。

M 「おお、ここは……女！ 目を覚ませ！」

千晶、倒れたままうつすらと目を開け。

千晶 「うう……」

M 「己を手を取れ……己は千口、お前のワザ
と共にあり、暗き欲望を叶える者……」

千晶、朦朧とした目つきで、よろめき
ながら刀に手を伸ばす。

瞬間、符と鎖が砕け散り、砂粒となっ
て地面に落ちた。

千晶の目に、妖しい光が灯る。

刀を握りしめ、猛然と立ち上がる千晶。
(※以降、千晶の台詞とト書きは千口
と記す)

千口 「ふふふ……ふはは！ やったぞ！ こ
の己が——妖刀千口が、また生き血を吸え
る！」

ふらついて、膝をつく千口。

千口 「ふは……は……？」

千口、刀を握ったまま倒れてしまった。

■病院・個室(夜)

ベッドで寝かされている千口。

千口「目を覚ましん……？」

突然、眼鏡の女が視界に入ってきた。

千晶が働く幼稚園の同僚、ミヤ(23)だ。

ミヤ「園長先生！ 千晶ちゃんが起きましたー！」

中年の男も、視界に入ってきた。

幼稚園の園長、佐治(40)だ。

佐治「おお、これは良かった！」

千口「(起きあがってミヤに)誰だお前？」

ミヤ「誰って、ミヤよー同僚の！ 頭打ってボケちゃったの千晶ちゃん？」

佐治「水間先生は幼稚園の裏で倒れていたんですよ。こんなものを抱えて」

佐治、刀を抱えている。

千口「先生……？ ようちえん？」

ミヤ「もー、やっぱりボケちゃってる。千晶ちゃんも私もまどがおか幼稚園の先生ですよ、新任ほやほやの！」

千口「むう……この体の記憶を探るか……」
俯いて考え込む千口、笑い出して。

千口「プ……あはは！ 年端もいかぬ子どもを育てる職だ?! この千口が！」

ミヤ「センコー？」

佐治「ふうむ……怪我は無いようですが、まだ混乱しているようですねー」

千口「まあいい、体ならいくらでも替えられるからな！」

佐治から強引に、刀を奪い取る千口。

鞘から抜かれてゆく刃が、ゾッと輝き。

千口「貴様等を叩っ斬って、もっと動きやすい体を手に入れて……」

ギイーン——音叉のような音。

突然千口の体に電流が走り、同時に刀身が震えだす。

激しい頭痛に汗を流し、両手で頭を抱える千口。

千口「ぐあ……なんだこれは……！ か、体が……己を縛りつけて……」

声「生ある者を斬ることはまかりならん——」

ミヤ「千晶ちゃん!？」

佐治「水間先生！ どうしました!？」

声「育てよ、子を——育てよ、その刃で——その体のワザに倣わねば、汝は滅ぶ」

千口「だ、誰がそんなこと……」

声「汝は滅ぶ……」

ノイズが大きくなり、さらに激痛が。

千口の額に脂汗が滴る。

千口「わ、分かった！ や、やる……！」

苦しさのあまり、刀を下ろす千口。

すると音が静まり、頭痛も収まった。

千口「なんなんだ、この体は……!?」

心配そうに見ているミヤと佐治。

■幼稚園・職員室(数日後)

ネクタイ・Yシャツ・スラックスという喪服に近い男装に身を包み、髪を後ろでまとめ、包帯ぐるぐる巻きの刀を持った千口。

釈然としない顔で、佐治の隣に立っている。

自分のデスクから、にこにこ機嫌そうに見ているミヤ。

隣のデスクでは若い男性職員の間田

(24) が怪訝な顔をしている。

佐治「……というわけで、水間先生も本日から復帰して、新しいクラスを受け持つことになりました」

千口(声)「どういう状況なんだこれは……他の体にも移れんし……」

ミヤ(拍手して)「わー、ネクタイ似合うねー」

岡田「……なんでそんな男みたいな格好で出勤してくるんだ？」

千口「久しく愛しい俗世の生活だ、女の格好は我慢ならん」

岡田「はあ？ 幼稚園の仕事なめるのか」

佐治「まあまあ、元氣なら今はそれで。もう園児達も、教室で待っておるようですか

ら」

ミヤ「はい！ 楽しみー！」

岡田「……まったく、幼児の前に立つ教育者たるもの服装から……ブツブツ」

立ち上がり、職員室を出ていく岡田。

佐治「ささ、水間先生も！」

千口「妖刀たる己がガキの世話など……うー！」
またしても、激痛に頭を抱える千口。

千口「や、やらないとは言っていない！」

佐治(心配そう)水間先生？ 大丈夫ですか」

千口(苦しそう)大丈夫だ……くそっ、なぜ拒むところなる……！」

■ 同・廊下

千口とミヤ、自分達の担当クラスに向かつて歩いている。

ミヤ「本当に千晶ちゃんが戻ってきてくれて良かったー！同期って千晶ちゃんだけだし、愚痴れる相手が欲しかったんだよねー」

千口「ふん、問題でもあるのかよ」

ミヤ「最近は何んかモンペもいっばいいるって聞くし、園児の名前も覚えにくいんだもん。

岡田先生は真面目すぎて融通聞かないし」

千口「岡田……ああ、さっきいた痩せっぼちの表六玉か」

千口の脳裏、岡田の仏頂面。

ミヤ「(爆笑)ひょろくだま！千晶ちゃん、前から変わってるとは思ってたけど、お婆ちゃんみたいな言葉使うのねー」

千口「……前から？」

ミヤ「うん、ボートとしてると思ったら、いきなり『神様に話しかけられた』とか言い出したり。巫女さんの血筋だものね」

千口「巫女……そうだったのか」

ミヤ「もー、自分のことでしょ」

千口「余計な記憶は、引き出さないことにしているからな。疲れるし」

ミヤ「？」

千口(声)「巫女の体か。この体から出られぬことと何か関係があるのか……？」

■ 同・教室

元氣いっばいに騒いでいる、5歳の年少園児達。

特に騒がしい男子園児、たけ。

黙々と折り紙を折っている女子、みか。

突然、がらりとドアが開いた。

仏頂面の千口が、無言の圧力を発しながら入ってくる。

迫力に怯え、押し黙る園児達。

大勢の園児に見つめられ、千口も余計に顔が強ばる。

千口「あ……己は妖刀……じゃなくて、え

ーといや、千口だ……千口先生、らしい」

呆然としている園児の中で、一人元氣なたけ「千口せんせーこんにちはー！」

千口「お、おう……とりあえず何をすればいいんだ……？ 教えろ、己の宿る体……」

千口、目を瞑って、悩みながら。

千口「……遊戯だと？ この己にガキどもの機嫌を取れというのか！」

顔を曇らせる千口、一層怯える園児達。

たけ「千口せんせー、なんかやろうよー！」

千口「ぬう……なんかと言われてもだな」

みか、持っていた折り紙を、千口の方に差し出す。

みか「(意地悪そう)先生、折り紙じょうず？」

千口「(つい受け取って)折り紙か……」

千口、鞆に巻かれた包帯を一気に解く。

何枚もの折り紙を手にした千口、それを高く舞い上げる。

はらはら舞う折り紙、刀を抜く千口。

幾つもの神速の太刀筋が、空間に刻まれる。

折り紙が、見事で多様な水鳥の切り絵となつて、床に落ちた。

千口「折ることは出来ないが、切ることは出来る……これが妖刀千口の切れ味よ」

たけ「(目を輝かせて)わー！ すっげー！」

たけに続き、手のひらを返すように切り絵に群がり、奪い合う園児達。

みか「(一人むくれて)こんな折り紙じゃないもん！」

千口「(呆れ)いや少しは恐れるよお前ら……」

■ 同・教室前の廊下

ドアの隙間から教室を覗き、満足そうに微笑んでいる佐治。

■ 千晶のアパート(夕)

ボロい二階建てが、夕焼けに染まる。

■ 同・千晶の部屋(夕)

狭い六畳間、げっそりした顔で部屋に入ってくる千口。

千口「なんと長い一日だ……通行人切ろうとしても体が言うこと聞かんし……それにしても！」

千口、包帯を巻いた刀を握りしめて。

千口「(天井に向かって叫ぶ)出てこい！ この己にこんな下らぬ呪いをかけやがったヤ

ツ！ 何処かで見ているんだろが！

——静寂。

隣室から、壁を荒々しく叩かれた。

声「ちよつと水間さん、こんな時間に大声
出さないで〜！」

千口「(びくりとして)すまぬ！」

うなだれる千口、敷いてあった布団に
がつくりと膝をつく。

千口「何故謝るのだ、己よ……」

ふてくされる千口、そのままうつ伏せ
で布団に倒れ込む。

千口「もういい……落ち込んでも始まらぬ！」

× × ×

幼稚園の教室、園児達に囲まれたエプ
ロンにジーンズ姿の千口。

千口は優しげな笑顔で、園児達を見つ
め、園児達と『かごめかごめ』をして
いる。

× × ×

千口「！」

汗だくになって、布団の上でハッと目
覚める千口。

いつの間にか甚平を着て、刀を抱きし
めて寝ている。

千口「この己が……夢を？」

横を見ると、部屋の隅に置かれた姿見
の鏡に、千口の顔が映っている。

千口(声)「いや……この体の夢か？」

■幼稚園・職員室(翌日)

無然とした様子でため息を吐きながら
入ってくる千口。

千口「ぬー……今日も来てしまった……」

奥の応接用ソファで、セレブな若い母

親・田中寄子(30)が、対面に座った佐治

に吠えたてている。

寄子「園児が真似でもしたら、どう責任をと
るんです！」

佐治「はあ、まあ……しかし、誰かを傷つけ
たわけでもありませんし……」

寄子「それになんですか、この不潔な施設は！

私が隅々まで掃除したいぐらいです！」

寄子、しきりにハンカチで自分の手を
拭いている。

佐治「そ、そんなに汚いですかねえ……」
千口に気づいたミヤと岡田が、慌てて近寄ってくる。

ミヤ「千晶ちゃん、大変だよ！」

千口「……何事だ？」

岡田「クレマーが来てるんだよ、園児の母親。あんた、昨日園児の前でおもちやの刀振り回したんだって？」

千口「(ムっとして)己をおもちやだと」

ミヤ「千晶ちゃんを辞めさせろって怒鳴ってたよう……？」

千口「ほう、それは好都合……」

またしても激痛が走り、仰け反って硬直する千口。

千口「(色っぽく)ん……ああッ！」

岡田「(ドキっとして)!!」

千口「じ……自分から辞めるんじゃないでも駄目なのかくそ……ん？」

包帯巻きの刀が、小刻みに振動している。

千口、頭を抱えながら刀を見つめるが、すぐに振動は治まる。

千口「この気配……いや、気のせいかな」

千口、怪訝に見てくるミヤ達を後目に、寄子の方へと向かっていく。

佐治「(気づいて)おお、水間先生……」

寄子「貴方ですか、幼稚園に刀を持ってきた先生って」

千口「朝からクソやかましいな潔癖女」

寄子「け……潔癖女!？」

佐治「水間先生! ご父兄の方にその言葉遣いは!」

千口「(無視して、刀を構え)『これ』がそんなに怖いかな？」

寄子「こ、子供に悪影響だと言っているんです!」

包帯を一瞬で解く千口——そこには、刀ではなく丸められたポスターが。

佐治・寄子「へ？」

ポスターを広げる千口。

歯ブラシを持った子供の絵に『きちんと歯磨きをして虫歯菌退治だ!』と書かれた、歯磨き推進用ポスター。

千口「ええと……虫歯は子供の天敵だからな。常に持ち歩いて、注意を促している」

佐治「そ、そうなんですよ！ いやあ真面目
だなあ水間先生は！」
寄子「そんなはずは……うちの子はちゃんと
刀を見たって……」
千口「子供の言葉を額面通りに受け取るな。
母親としての技量が足りないぞ」
唾然とする寄子。

職員室から見える、窓の外。

腑に落ちない様子の寄子が、ハンカチ
で体を払いながら去っていく。

ホッとしながら見送る佐治とミヤ。

佐治「ふう、やり過ぎたようですね……」
ミヤ「すごいねー千晶ちゃん！ ポスターな
んて持ち歩いてるんだね、真面目だなー」
千口「形状ならば、ある程度は変えられるか
らな」

岡田「……形状？」

千口「いや、何でもない」

ポスターに包帯を巻きながら、落ち込
んで深いため息を吐く千口。

千口(声)「咄嗟とはいえ、己をあんなしよう
もない物に変えてしまおうとは……」
千口の横顔を、怪訝に見る岡田。

■ 同・教室

たけら園児達が、粘土と格闘している。
刀を傍らに置き、床にあぐらをかいて
見ている千口。

たけは難しい顔で、何とか粘土を人の
形にしているが、かなり歪つ。

たけ「みか！ 人間だぞ人間！」

みか「たけくん、へたすぎ……」

千口「本当に下手だな……もつとワザを磨け」
みかは器用に、粘土で象を作っている。

たけ「おー、みかはさすがだなー！」

みか「(赤面しながら千口を見て)えへ……先

生は粘土じょうず？」

千口「……んー？」

面倒そうに立ち上がる千口。

片手で余っていた粘土を拾い、それを
上空に高く放り投げて、抜刀。

手元は見えず、太刀筋はやはり幾筋の
閃光の様。

落ちてきた粘土は、異様にリアルな龍

を象っていた。

またしても喚き立つ園児達。

たけ「すげー！ やっぱせんせーすっげー！」
みか「(半泣き) こんな粘土じゃない！」

■同・校庭

高い太陽の下、滑り台やシーソーなどの遊具で思い思いに遊ぶ園児達。
木陰のベンチに座って、呆れながら見ている千口。

千口「奴らの気力は底無しか…侍百人相手にするよりきついな…」

楽しそうに滑り台から降りてくるたけを見ながら、千口の臉がうつらうつらと船を漕いでいる。

たけ「おしっこ行ってくるー！」

■同・トイレ

男子用便器で用を足しているたけ、笑顔でスツキリ。

窓から風がそよぎ、たけの顔に小さな影が映る。

ふと見るたけ。

開いた窓の上から、疑似餌のように不自然に、ハンカチがぶら下がっている。クレーマー・寄子が持っていたハンカチと同じ物だ。

たけ「(近づいて)なんだこれ？」

手に取ろうとするたけ。

突然ハンカチが蛇のように伸び、たけの手首に巻き付く。

たけ「！」

■同・元の校庭

ベンチに横たわって大切そうに刀を抱きしめ、寝ている千口。

そこに、岡田が通りかかった。

岡田「(呆れ)園長に言われて様子を見に来たら…働く気があるのか、全く」

よく見ると千口は、Yシャツの胸元がはだけている上に、ノーブラ。
寝顔は口が半開きで無邪気。

千口「(吐息)ん…」

岡田「(ドギマギしながら)う…お、起きろよ水間先生！」

千口「んあー…？？」
むくりと起きあがる千口。
千口「あれ、寝ちまってたか…？」
岡田「休憩時間でも無いのに寝るんじゃない。
またモンペアが来るぞ」
千口「ぐだぐだとうるさいな、切り捨てられ
たいかー！ん、ふああっ!？」
激痛に、色っぽく悶える千口。
岡田「!？」
千口「うぐぐ…：…言ってみただけだって…：…」
岡田「(赤面して動揺)なな、何なんだよもう」
みかの声「せんせー！」
千口「どーした、みか？ 生き血にでも飢え
たか」
岡田「どんな園児だよ…：…」
みか「…：…たけくんがいなくなった」
岡田「何だって!？」
みか「トイレ行っただけなのに、どこにもい
ないの…：…どうすればいい…：…？」
みかの目に、みるみる涙が溜まる。
岡田「大丈夫だよみかちゃん。先生達がちや
んと探してくるからね」
千口「あー？ そのうち戻ってくるだろ」
岡田「アンタの監督不行き届きが原因だろ！
責任持って死ぬ気で探せ！」
千口「へーへー…：…ちっ、面倒くせえ」
そのとき、千口が持っていた刀が音叉
のように鳴り響きだした。
千口「！」
握りしめる刀は、大きく震えている。
千口「いる——近くに殺気の強い『同類』が
いやがる」
千口、音に気づかないみかと岡田を横
目に見て。
千口「気配が離れていく…：…まさか『同類』
があのかきを…：…(いきなり立ち上がり)お
い、お前ら！」
びくりと振り向く岡田とみか。
千口「外を見てくる！ 園から出るなよ！」
岡田とみか、反射的に頷いてしまう。
千口、刀を握って園を飛び出していく。

■ 人通りの少ないビル街の間を
脇目も振らず疾走する千口。

千口「近い！ 頭も痛くない！ くくく、人間は切れなくても『同類』はいいのか！？」
ハッと、頭上を見上げる。
ビルからビルへと、子供を抱いた人影が飛び移っている。
抱かれています子供はただだ。
千口「（ニヤリと笑い）みつけた！」

■ビル・屋上

気を失ったたけを抱えた黒い影が、隣のビルへと飛び移ろうとしている。
声「待て！ 己と遊べ！」

驚いて立ち止まり、振り返る人影。

刀を持った千口が、ほくそ笑んでいる。

千口「ん…：憑かれてたのはお前か」

露わになった人影の顔は、職員室に現れた寄子だった。

寄子「（怪訝そうに）む…：何用か」

千口「お前、人間の『ワザ』に取り憑いて『十九憑き』になった九十九神だろ？」

寄子「如何にも。この女は誰よりも汚れを憎み、汚れを厭うがあまり『掃除』のワザを必死に磨いた——我が宿るに相応しい！」

寄子の胸ポケットから、生き物のようにハンカチが這い出てきた。

ハンカチは裂けて広がり、寄子をドレスアップするように巻き付いていく。

寄子は、派手なミイラ男のような姿に変わった。

寄子「我は『掃除』の道具より生じた九十九神、シロウネリ！」

千口「シロウネリね…：そのガキに用かよ」

寄子「この子供は恐ろしく強い力を血に宿している——いずれは我ら、古き神全てを支配する王になるであらう」

千口「は？ そんな鼻タレガキがか？」

寄子「我は支配されることなど望まぬ。その血を浴び、我が命をさらに先へと延ばそう」

千口「ふうん…：確かに活きは良かったが、こんなのが己らの王ねえ…：」

寄子「貴様も同類か？ 何故その子供を喰らわぬ？」

千口「（苛立ち）こつちにも事情があるんだよ、

己も良く分らん事情が！」

たけ、千口の怒声で目を覚ます。

たけ「ん……？　ここどこ……？」

寄子「ち、起きたか」

たけ「あ、せんせーがいる！　せんせー、何してんのー？」

千口「呑気な奴だな……お前、その九十九憑きに血い吸われかけてんだぞ」

たけ「えー?!　マジで？　こいつワルモンなのか！　で、ツクモ何とかって？」

千口「九十九神は長い年月を経て、精を持つ

た器物の怪——人の持つ技術と呼応して、

人妖一体の強力な九十九憑きになるのさ」

たけ「へー！　よく分からなけれどすげー！」

千口「(呆れ)だから怖がれつつうの」

たけ「(満面の笑顔)怖くない！　だって、す

げー強いせんせーが助けてくれるもん！」

千口「……己が？　人間を助ける？」

声「子供を育て、守れ——」

千口「あー、分かった分かった！　ブツた斬

れるなら、誰だって構やしねえよ！」

寄子「このシロウネリと戦う気か。何者なのだ、貴様」

千口、ゆっくりと刀を抜いていく。

同時に千口の長い髪が解け、真っ白に

染まっていく。

鬼灯のように、瞳が赤く染まる。

千口「己の名は千口——人に憑き、幾百の人

間を斬り殺してきた、妖刀千口だ！」

千口の手で、刀が妖しい輝きを放つ。

寄子、たけを横に突き飛ばして、獣の

ように咆哮をあげる。

その腕から、新体操のリボンのように

ハンカチの布が幾本も伸びてきた。

千口、跳躍して避ける。

しかし布はミサイルのように、千口の

体を追尾。

千口「ほほー、しっつけー動きだな」

巧みに避けていた千口だったが、足首

に布が絡みついた。

千口「(力任せに振り払おうとして)ぬ……！」

布には強力な粘液が染みていて、千口

の足に糸を引いて離れない。

千口、布を切り離そうとするが、粘液

が邪魔して上手く切れない。

千口「ねばつきやがって、面倒くせえ」

もたついていると、さらに布が千口の体を襲う。

腕に、太腿に、胸に、首に、頭に――触手のように巻き付き、粘液を出す。

寄子「我は『掃除』道具の神と言ったはずだ。この女のワザと共にあり、どこまでもまわりついて、掃いて除いて消してみせよう」

千口「(苦しげ)ゴミ扱いするんじやねー……と言ったところでどーすっかなこの状況」

たけ「せんせー！ 折り紙やって！」

千口「あん？」

たけ、懐からポケットティッシュを取り出し、ティッシュをばらまく。

同時に、何やら念じ始めるたけ。

その体から雷のような燐光が放たれ、宙を舞うティッシュを光が覆う。

千口「お前、その力は……」

ティッシュは吹き飛ばさず、静止したまま滞空している。

千口「(ハッとして)……そうか！」

千口、滞空するティッシュに刀を振る。

バラバラに千切れたティッシュが、千口や寄子を覆う布にへばりつく。

寄子「な、何の真似だ……？」

千口「けひひ……水を切るのは面倒だが、水の入った瓶なら切るのは楽なことだ！」

千口、さらに刀を振る。

まわりついていた布が一瞬で切断。

寄子「紙で粘液を隠したのか――ならば！」

寄子、布を一塊に集中させて切り離し、ボールのようにして投げつけてくる。

しかし、ボールにはすでに先程のティッシュがへばりついていて、

不敵に笑う千口、一度刀を鞘に収め、抜刀。

刻まれる、幾筋もの閃光の如き太刀筋。

落下したボールは、ささくれたポロボロの龍を象っている。

千口「粘土のようにはいかんがな」

寄子「(焦り)むう……!!」

寄子、たけに向けて布を伸ばす。

たけ「わ?!」

布に捲かれるたけ、寄子の眼前に盾として引き寄せられる。

寄子「この子供の命が惜しくなくば……」

千口「うつけが！ そんな姑息な真似で、この己から逃れられると思うな！」

刹那の間に、千口は高く跳躍。

たけ「先生、いっけー！」

千口の刀身が幾重にも裂けて伸び、古代の『七支刀』の様に。

千口「千々に砕け、物に還れや、あぶれ神！」

千口、裂帛の気合いを込めて刀を振り下ろす。

裂けた刃がたけを迂回、曲線を描いて寄子の体を貫く。

絶叫をあげる寄子。

寄子「おのれ……！ 我を滅ぼそうとも、その子供はあらゆる九十九神を引き寄せ、他の人間も巻き込もうぞ！」

千口「(邪悪に笑み)そりやあ大歓迎だ」
布に包まれたその輪郭だけが左右に分断され、雲散霧消。

中から元の姿の寄子が現れ、千口の足下に倒れる。

その上に、千切れて細切れのハンカチが落下。

たけ「(心配そう)死んじやったの……？」

千口「九十九憑きを殺しても、消えるのは憑いていた九十九神だけだ」

たけ「へえ……やっぱすっげー！ せんせーはすっげーかっこいいせんせーだ！」

たけ、嬉しそうに千口に抱きつく。

千口「(鬱陶しい)己は妖刀だ……仕方なく先生とやらをやらされてるだけで……」

たけ「じゃあ神様が、せんせーが立派なせんせーだと思っただけでやらせたんだな！」

千口「神……？」

千口の脳裏。

過去、千口を倒した僧形の男。

僧形の男「目覚めを待て。劍神の詔により貴様が遣われるべき日を……妖刀千口よ」

千口「ふん、そんな馬鹿なことがあるか……」

■ 幼稚園・入り口(夕)

みかとミヤが、それぞれ祈りながら遠くを見やり、心配して待っている。

二人の視線の先、夕陽の向こうから、千口がたけをおぶって戻ってきた。

パツと明るい顔で、千口に駆け寄っていくみかとミヤ。

みか「(たけに抱きつき)たけくーん！ 良かったー！」

ミヤ「千口に抱きつき)わーん千晶ちゃん、心配したよー！」

千口「(こそばゆそうに)うぜえなあ……」

みか達の後ろには、穏やかな笑顔の佐治。

隣で腕を組み、無然としている岡田。

佐治「それこそが、お前を奮うべきワザだ」

岡田「は？」

佐治「人を切ることだけが刃のワザにあらず。友を持って。荒ぶる神々と戦い、我が子の再

来、建御雷と子供達を守る布都の刃たれ」

岡田「園長、何の話ですか……？」

佐治「巫覡、君にはしばらく迷惑をかける」

千口の顔が一瞬、穏やかな『千晶』としての表情を浮かべる。

千口「いえ、子供を守るためなら少しの間体を貸すぐらい……私も園の職員ですから。

園長「……いえ、天之尾羽張様」

ミヤ「(千口から離れて)えっ？」

ミヤが見上げると、千口の顔はすでに気難しそうな表情に戻っている。

千口「(気づかず)ん？ 己が何か言ったか？」

佐治「さあさあ、他の園児達も心配しておりますよ！」

佐治、踵を返して園内に戻っていく。

ミヤ「あ、はい！ 千晶ちゃん、戻ろ！」

たけも千口の背中から飛び降りて、園内に駆けていく。

必死に追いかけるみか。

たけ「(振り返り)せんせー、明日も遊ぼうな！ またすっげーワザ見せてくれよ！」

千口「(ほんのり赤面)けっ……己の切れ味をまた見たい、なんて人間はお前が初めてだ」

千口、苦笑いしながら刀を担いで園内に戻っていく。

■ 同・校庭(夕)

人気も無くなり、茜色の夕陽に染まる

遊具が寂しい。

すべり台付近を、不機嫌そうに箒で掃除している岡田。

岡田「まったく、園長は何考えてるか分からんな……あんな不真面目なヤツ、俺が園長ならクビ切ってるのに」

声「クビを切るなら……手を貸すよ……」

岡田「ん？」

岡田が顔を上げると、風を切り裂くような音と共に、空の彼方から何かが飛来。

轟音と共に、岡田の目の前に突き立つ。

それは豪華ながら、禍々しい意匠の西洋剣。

声「あはー、ここが日本か……」

岡田「(驚愕)……ひ、ひいッ?!」

声「私は『魔剣』ティルヴィングラー——貴方のワザと共にあり、友に破滅をもたらす者……」

夕陽を反射して輝く魔剣。

岡田、驚きながらも魅入られたかのように見つめている。

了